

[翻訳]

## 北朝鮮文学に現れた女性登場人物の形象化の意味

The Meaning of the Creation of the Feminine Characters  
in the North Korean Literature

キム・ヒョンスク 著 西村裕美 訳

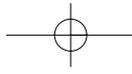
KIM, Hyung-sook NISHIMURA, Hiromi

### <解説>

本稿は、韓国ソウルの梨花女子大学韓国女性研究院が発刊する『女性学論集第11集』（1994年）に掲載された論文を、訳出したものである（김현숙, “북한문학에 나타난 여성인물 형상화의 의미” 『여성학논집』 이화여자대학교 한국여성연구원, 제 11 집, 1994.）。論文の著者であるキム・ヒョンスク（金賢淑）氏は、現在、梨花女子大学国語国文学科の教授職にある。

本論文が最初に発表されたのは、1992年に開催された韓国女性研究院主催による「第2回統一問題学術セミナー」（後援・韓国統一院）の場においてである。韓国女性研究院は、南北統一を睨みながら女性の視点で南北間の生活文化の質を比較検討しつつ、その差異を是正するという意図に基づいて、1991年以後、統一問題に関する学術セミナーを独自に継続してきた。韓国社会では、政治・経済領域において南北統一を視野に入れた活動が以前から活発に行なわれているが、女性学の領域で他に先駆けるこうした試みは、大きな意義をもつものであると言える。2000年には、朝鮮民族の大学として知られる中国（中華人民共和国）にあるヨンピョン（延辺）大学を介して、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）のキム・イルソン（金日成）総合大学の女性教員たちと、学術交流も果たしている。さらに、2001年3月には、10年間に及ぶその成果が『統一と女性－北朝鮮女性の生』（梨花女子大学韓国女性研究院・編）と題して、梨花女子大学出版部から一巻本として刊行された（『통일과 여성－북한 여성의 삶』, 이화여자대학교 한국여성연구원 엮음, 2001.）。

当然のことながら、本論文の著者キム・ヒョンスク氏も、上記の刊行本で分担執筆をしている。しかし、「文学から読む女性」（“문학에서 여성 읽기”）という題で収録されている著者のその論文を、今回、あえて訳出しなかったのには理由がある。それは、単に、本稿と重複する部分が多いというだけではなく、北朝鮮社会において女性がどのような位置に置かれているのかという、その全体像を把握するには、本稿の内容がよりまとまっており、また適切でもあると考えたからである。2001年版に収められた著者の論文よりも、あえて、1990年代前半に書かれたものを今回訳出したのは、このゆえである。翻訳の分量は、原文全体の約80パーセントに相当する。また、原文にあった脚注はすべて省略した。（西村裕美 記）



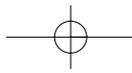
## I. 序論

北朝鮮 [朝鮮民主主義人民共和国] の文学は、共産主義国家の国家理念であるマルクス・レーニン主義に立脚した社会主義リアリズム文学を美学とする。それゆえ、北朝鮮の文学は、同時代の生の現実をそのまま文学に反映するというよりは、文学があるべき現実の姿を表象するときに真実のものとなり得る。また、人びとを導くことのできる原則を方針として提示するとき、それは真実のものとなり得る。それゆえ、こうした指導方針は、党の方針どおりでなければならない。したがって、読者が文学の中に描かれる事象と現実とを同一のものともみならずような技法、また、作中人物も実際の人物と同一視される事態が生じるような技法が選ばれている。北朝鮮文学のこうした特殊性は、1948年以後いっそう強まった現象だ。それ以前の南・北朝鮮が文学的土壌を共有していた時期は、共産主義イデオロギーによって導かれるという現象はあったものの、唯一その現象のみに支配されていたのではない。しかし、朝鮮戦争による南北分断の結果、表現形態としての言語は依然共有してはいるものの、文学を形象化する意識の差異はより一層はなはだしくなっている。すなわち、韓国 [大韓民国] の文学は、人間を取り巻いている多様な葛藤の諸要素が、小説の前面でテーマや素材として取り扱われるのに対して、北朝鮮の文学は、すべての問題が社会または国家の問題に直結しており、個人の問題であるよりは個人によって代表されうる集団の問題となる。

文学は、目に見えない世界、起こりうるが起らないこと、そして起こったことであっても作家を通じて新たな視線で事件を見ることによって、読者を想像の世界へと引き入れ、人間の葛藤の原因を見出させ、その解決の可能性を読者と共有するものだ。したがって、文学は、社会の欠陥を示し、いっそう優れた世界へと向かうための問題を提示し、その解決の可能性を探求する場である。しかし、北朝鮮の文学は生と文学が分かたれず、理念化を志向するのが目的であるために、文学が読者を想像の世界へと引き入れるのではなく、実際の現実を反映することにどれだけ忠実であるかが最も重要な関心事となる。したがって、文学において取り扱われるテーマ、事件、そして人物は、北朝鮮社会で起こる現象を取り上げるものだ。

しかも、北朝鮮文学において、登場人物を創作するというのは、社会が必要とするさまざまな類型を典型化する作業でもあった。そして、それらの類型化されてきた登場人物は、主に社会を導いていくことのできる主導的人物としての男性に限定されており、女性の場合は、指導的人物としての典型化の対象から除外されていることがわかる。しかし、文学の中では女性の登場人物それ自体は除外されるわけではないために、登場人物の役割が何であるか、あるいは彼女たちが作品中で存在する様相や女性の登場人物たちが創りだされる意図を探ることはできる。

一般的に、文学で取り扱われる女性の問題は、二つの側面からのアプローチが可能だと言えよう。第一は、西欧のフェミニズム理論で論議される女性運動次元からのアプローチである。こうした場合は、純粋文学的なアプローチというよりは、社会運動次元での目的実現のための

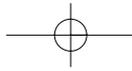


ものとなる。第二は、女性の登場人物たちが文学の中で取り扱われている様相を知り、その意味を探る文学内在的なアプローチとなるだろう。韓国文学では、これら二つのアプローチがあまり適用されている。しかし、北朝鮮文学においては、女性作家たちがどのように位置づけられているかを具体的に知る事ができず、推測するのみである。しかも、西欧のフェミニズム理論で研究対象とするような、女性作家たちの文学作品のみを集中的に分析する作業は、北朝鮮文学では未だ普遍的ではない。北朝鮮文学においては集団文学の時期を脱し、現在では個人作家の作品活動が活発に始まってはいるものの、未だ女性作家たちやその作品群に普遍的に接することが困難であるからだ。それゆえ、まず、文学において取り扱われる対象としての女性を検討することによって、北朝鮮社会における女性の位置を推測することができるだろう。そうした推測をより具体化するためには、作品の分析が必要だと思われる。

上述のように、北朝鮮文学においては女性の登場人物がどのように形象化されているか、その形象化の意味とは何かを明らかにすること、これが本論の目的である。しかし、資料の面でも女性作家たちの作品ばかりを読むことができないという限界があるため、作品に登場する女性の姿を通して考えるほかないという物足りなさがある。北朝鮮文学が現実を反映したものであり、現実を扱っているとはいえ、文学は際立った世界だ。彼らを選択して際立たせている作品中で設定されている女性たちはどのような特性で形象化されているのか、また、言語表現の世界と形象化された人物の内的意味との差異はいかなるものかが、ここでのテーマとなるだろう。そうした作業をするために、まず、北朝鮮文学の潮流を点検してみることにしよう。

北朝鮮の文芸潮流を知るために『朝鮮文学史』を検討してみると、北朝鮮は、他の社会主義国家と同様に共産主義理論を提示しており、1960年以降、北朝鮮固有の思想体系である主体思想の原則を加えて、文芸理論が展開されている。

北朝鮮で提示されている文学の原則は、次のように要約されうる。その第一は、文学は社会的政治的現象と同様に、党の文学、労働者の文学として「人民」が優先するというのが原則であり、共産主義国家における「党」とは、資本主義国家における宗教をはるかに超えた絶体的共同体を意味する。北朝鮮における党は、70年代以降は主体思想と同一視され、党はすなわち首領かつ主体思想として公式化されている。第二の原則は、内容においては社会主義であり形式においては民族的なものを強調することである。社会主義的内容とは、革命的かつ階級的な内容として、古いものを無くし新しいものを強調する内容でなければならない、勤労人民の利益を擁護しようという内容と、帝国主義に反対して闘争せねばならず、すべての人びとを幸せにしようという作品でなければならないということの意味する。第三には、北朝鮮の文学芸術は組織と集団性を重要視する。第四には、主体思想に立脚した「種子論」に基づく人間学を強調し、第五には、「無葛藤論」を挙げることができる〔後述〕。こうした北朝鮮の原則論は、いかなるときでも党大会の理念を原則とし、その時どきのキム・イルソン〔金日成〕の「文学芸術に対する指導」方針に従ってきたために、文学という一芸術ジャンルとしての独自性ではなく、



人民を教導するという目的のための手段として書かれてきた。こうした原則論が現れるまでの北朝鮮の文学史について、キム・ハミョンは次のように言及している。

「過去40年間の我われの文芸学の歴史を、二つの段階に分けて考察することができます。その第一段階は、祖国が解放された1945年8月15日から1960年代まで、第二段階は、社会全体において主体思想という課題が前面に立った1970年代以降の時期です。第一段階で、文芸学者の隊列を整えて文芸理論と文芸史研究の基礎が作られたとすれば、第二段階は、研究の体系と方法において確固とした主体を立て、独自の特色を明確にするとともに、文芸学が急速に全面展開するようになりました。」

以後、1965年に具体化された北朝鮮の主体思想は、北朝鮮文学の支配的な思想として定着した。これが、北朝鮮のマルクス・レーニンの共産主義思想において独自の路線を持ってきたということである。また、主体思想は人間学であることを強調している。すなわち、「人」であることを強調し、社会的人間であることを語るのみで、男性と女性とに分けず、役割も区別していない。

こうした点に関心を持って文学作品を分析してみると、彼らの思想の根底にこめられている女性の姿は果たして現実のものであるのか、彼らが主張するように女性たちも主体的で人間的であるのかという点について推察することができよう。加えて、彼らが形象化する女性たちは社会でどのような役割と位置にあるのか、そして北朝鮮文学において女性と家庭、女性と家族、そして女性自身の姿はどのように提示されているのかが明らかになるだろう。

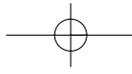
なお、得られた結論で南・北間の文学の優劣を付けるものではないことを明言しておく。1950年以降、分断された文学空間を作り出した意識の究明は、いつの日か共に研究すべき課題である。その点検段階として、文学の形象化の差異を見ようとすることがまず先決であり、それによって生じた差異の幅を狭めるための可能性を探求することが、その最終目的であることを明言しておく。

研究方法としては、文学に登場する女性たちの時代別変化と継続の属性を中心に、抗日闘争期、革命闘争期、祖国解放戦線、戦後復興期および社会主義建設の草創期に女性たちが果たした役割を見ながら、女性の属性をまとめてみた。

## Ⅱ. 待つ人びと

対象との間で「待つ」という行為は、「会う－別れる」という一切の行為の後に現れるようになるものだ。また、待つというのは「会える」または「会わねばならない」という信念と確信から生じる心理的状态が伴ったものだ。

我が国の文献に記録された最も古い「待つこと」の物語は、パク・チュサン [朴堤上] の妻が石と化した「待つこと」や、こうした物語を詩にしたワンゴン [王建] の望夫石 [妻が夫の帰りを待ちわびた末、死んでしまい、石と化した] だ。その他にも多くの「待つこと」の歌が



あるが、これらはたいてい恋人を待つということになっている。

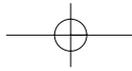
こうした「待つこと」は、通常、再会するだろうという期待が必ず伴うことになる。すなわち、帰ってくるだろうという信念のうちで、苦痛に打ち勝って貞淑な妻の座を占めた女性がチュニャン〔春香〕であろう。このように、待つことは我われの時代以前から文学の素材として多様にその形態を表現している。文学において待つという行為は、恋人たちの間の感情をあつかう個人的次元から始まったと思われる。南北分断以後、「待つこと」という素材は、それ以前の諸作品で見られていた個人的感情の位相を離れた形態をとっている。こうしたことは、南北共通の現象だと思われる。

『朝鮮文学史』は、「待つこと」の主体を母として設定している。抗日革命闘争期や朝鮮戦争の傷跡が母たちにだけ該当するものではないだろう。しかし、別れた子どもに対する、それも息子に対する恋しさの色合いが褪せるとしても、その最後の最後まで諦められないのが母たちであるだろう。また、母という対象は、人それぞれに個人的体験の幅が異なるとはいえ、類似した感情の位相を持ちうる対象だと思われる。したがって、人びとにとって母という語彙は、永遠の恋しさの対象であり、唯物論によって説明できず、キリスト教でも処理しきれない対象であり、生まれてから死ぬまで決して忘れ去ることのできない、限りなく恋しい実体、最も純粹な感情の集合体だと思われる。

北朝鮮文学においても、作品の主人公として扱っていない場合でも、そこかしこに「母」を発見できる。その母たちは、抗日革命期と同じように、南北分断によって別れた息子に対する恋しさを胸に抱いて待つ姿であり、1980年代の北朝鮮文学においても同様に見られる。南側〔大韓民国〕に去った息子（鳥類学者ウォン・ピョンウ）の物語を実名小説として書いたリム・ジョンサンの「コムクドリ」では、南側から飛んできた鳥の脚にはめられた輪に息子ウォン・ピョンウの名前を見て、夫（ウォン・ピョンウ博士の父ウォン・ホンギル）の前では息子に対する恋しさの素振りすら見せなかった女性が、息子が送った脚輪をはめたコムクドリを見て、次のように吐露する。

「お前！ どうして脚輪に何字か書いて、手紙として飛ばせなかったの。ひょっとして、書くことができないのかい。子どものころ麻疹〔はしか〕にかかってこの母さんをひどくやきもきさせたのに、すっかり大きくなった今でも……」

キム・ジョンの「待つ心」は、話者である「私」がバク・サンゲムという女性の話を伝える小説だ。その女性は、夫が太平洋戦争中に出征して死に、独り身となった。近所の大人にくっついて南側に行き、戻ってこない息子トンファを待つが、息子はいま盲目となって南の地のどこかに暮らしていることを知るにいたる。そして、自分の気持ちを次のように表現している。



「統一へ向かう道で我が身が一個の踏み石となれるなら、母はこの一身を躊躇いなく捧げよう。目が見えなくなったとって気を落とすんじゃない。お前、盲目とはいえ、生きているではないか。統一のために血を流しながら成果を見届けられずに死んだ若者たちがどんなに多いか。だから、しっかり生きて統一を待て。統一のための仕事に我が身を捧げつくせ。歌を歌うにも統一の歌を歌い、祈りを捧げるにも統一のために祈れ。皆が踏み石になれば統一はもっと早くやってくる。母はその日を固く信じる。シム・チョン [沈清] の忠誠によってシム・ボンサ [沈奉事。沈清の目が見えない父] が目を開いたように、統一さえできれば、お前もシム・ボンサのように目が見えるようになるだろう。お前を見知らぬ土地に送りだしたこの母を許しておくれ。息子よ、愛する我が息子よ！ どうしているのか？」

このように、母たちの姿は、朝鮮戦争によって離ればなれになって会うことのできない息子を待つ姿で描かれている。

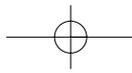
こうした母たちの姿は、北朝鮮文学においては、キム・イルソンの母カン・バンソクの人物形象化においてその原型が示されると言えよう。他者の視線で自身を見るカン・バンソクは、病からくる苦痛をかえりみず、息子を祖国復興のために送りだした後、自身の気持ちを次のように記している。

ああ、小さな窓から外を眺めておられる母上は  
凱旋なさる將軍様を目前にご覧になるごとく、  
束縛から解かれた祖国の春を  
カッコウが陽炎のなかを泳いで啼きわたる  
万景台の春の日を楽しまれるごとく

息子を育てる主体としての母の立場と姿勢に関する内容を、キム・イルソンは、自分の母を持ち出して強調しており、最も重要な位置にいるべき人物が母たちであり、母は偉大な愛を具えた教育者でなければならないことを強調している。こうした母たちは、今日でも北朝鮮で母の役割の重要性を強調する、次のような文と無関係ではないと思われる。

家庭教育においては母が重要な責任を負わねばなりません。なぜ父よりも母の責任のほうが重要なのでしょう？ それは、子どもたちを生んで育てるのが母だからです。子どもが最初に向かう教育者は母です。…母が子どもたちに最初の教育を上手に与えられるか否かが、子どもたちの進歩に大きな意義を持ちます。母が家庭教育を適切に行なえば、学校や社会の組織で教育するのは容易です。母が教育をしっかり行なえば、学校で勉強もよくし、社会に出て仕事もよくできます。幼いときに母から学んだことは、一生忘れません。我われが一





番長く覚えているのは、母の言った言葉、母の模範です。母が与えた印象は、人びとの性格と習慣を形作ることに於いて重要な影響を与えます。

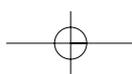
ここまで見てきたように、「母」は「祖国」の未来のために息子が共産主義にふさわしいその社会の主人として育てていくようにする責任と役割を果たすために常に準備ができていなければならない。国家が招集するときには常に先頭に立って出て行くことのできる息子として育てねばならない。また、そのようにして闘争の場に去っていった息子を待つ人物でなければならない。ここで息子たちは、おしなべて独立闘争のための戦場や南側に去っていき、統一が成ってこそ帰って来ることができる。だから、その母たちは皆、統一が成って息子に会うまでは死ぬことができない人びとだ。

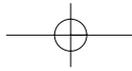
こうした母たちの姿が、北朝鮮の抗日革命闘争期から現代の小説に至るまで、母たちの典型を示すものである。この母たちのモデルとなっているカン・バンソクは、すでに他の女性たちとは異なり、卓越した息子を持つ女性である。それゆえ、息子を育てる母たちが皆揃って彼女を真似るために努力すべきであるのは、当然のこととなるだろう。

### Ⅲ. 革命の闘士たち

『朝鮮文学史』の時代区分で、20世紀初めの抗日闘争を反映した文学としての義兵歌謡、また、甲午農民戦争で歌われた口伝民謡（義兵隊歌）などにおける朝鮮革命文学の進歩的な愛国精神が、一時代の文学を超えて朝鮮の独立と繋がっているということが指摘されている。この当時の文学を、口伝民謡と「朝鮮の歌」のような創作革命歌謡とに区分して記述しているが、革命闘争に関する女性たちを取り扱った内容は、創作歌謡に見ることができる。その中でも「女性解放歌」、「女闘士の歌」を通して現れる「女性解放」というテーマに関しては、「あらゆる無権利と暗黒をもたらす搾取社会と搾取階級に対する限りない憎悪と敵愾心、社会階級の解放と新社会建設のための闘争精神で一貫している」と、記述されている。歌謡文学以後、創作革命演劇が登場するが、彼らの言う不朽の名作「城隍堂」[村の守護神を祀る祭壇]は、抗日革命演劇の原点となった記念碑的作品と見なされている。彼らが要約した内容は、次の通りである。

この作品は、我が国のある農村で繰り広げられた物語を扱っている。この作品には、ボクスニとその母、そして作男のトルセとマンチュニを一方に、ファン地主と区長を他方に配した多様な人物が登場している。この作品では、ボクスニの母がはじめ城隍神（土地と村を守るという神）を信じた後に、城隍堂を自分の手で壊すまでの過程で繰り広げられる多様な事件を提示しながら、ここに権勢欲と物欲に取りつかれたファン地主と区長との関係と、愚行によって引き起こされる悲劇的な事件を適宜に配合して話の筋を展開している。



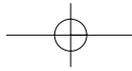


ところで、彼らは、この演劇文学について、「種子論」を用いて説明している。つまり、彼らの用いる種子論は、「すべての問題は、『神様』や誰か英雄豪傑が決定するのではなく、勤労人民大衆が決定するものだ」というキム・イルソンの教示に立脚したものである。こうした劇で彼らが新たな文学の技法として提示しているのは、肯定的人物（この作品ではトルセという作男）たちは最後まで真に肯定的に設定される人物として残し、否定的な人物は、終始一貫、非難と糾弾の対象として形象化しようというものである。そして彼らは、ひたすら地主と作男とを悪と善として対比させ、「地主のやつは処罰すべき対象」であり、作男は神聖な労働者階級であって、搾取と圧迫から決起し立ち上がらねばならない人物たちだ。北朝鮮文学は、文学史のテーゼからして「富者は打倒の対象として敵」であり、その者たちを打倒する主体は労働者たちであって、労働者階級は覚醒した人物たちとして設定されている。こうした人物たちは時間が経つにつれて覚醒し、朝鮮の解放のために闘争することになる。闘争に参加する人物の中には、「花咲く乙女」のコップニ、「血の海」のウルナムの母、「故郷」のカプスギのような女性たちがおり、こうした女性の登場人物の形象化となるモデルは、「血の海」に登場するウルナムの母だ。

北朝鮮文学の批評家たちは、女性と男性は世界観に対する自覚の様相が異なって現れる、という。すなわち、「血の海」の登場人物であるウルナムの母が革命的な世界観を形成する過程は、革命組織の指導と幫助が重要な役割をもつが、「ある自営団員の運命」の男性主人公であるカムニョンイが世界観を形成する過程は、純然と自らの生活体験によってなされるからだ、という。言い換えるなら、女性の登場人物が革命的な世界観を形成する過程は、自分の意志によって形成され共産主義者となるのではなく、脆弱だった女性の性格が周りの意志強固な男性の助けを得て人間改造されることによって変化する中で形成される、という。しかし、男性たちの場合は、誰の助けもなしに自ら革命的な任務を遂行する過程で自覚するという形態で示されるのだ。こうした点は、男性と女性とは本来的に世界認識の過程、ならびに生まれつきの性質が互いに異なるということを強調する要素だと思われる。

ここまで見てきたように、周りの助けを得てはじめて覚醒する女性の登場人物たち、そして、男性の助けがあってこそ覚醒が可能な女性たちというのが、彼らが典型とする闘争的・革命的な女性たちの姿である。

実際、こうした闘争的な登場人物の形象化の様相を時代別に調べてみると、朝鮮戦争を前後する時期である1945～1958年の文学は、三段階に分かれ、その第一段階（1945年8月～1950年6月）を、『朝鮮文学史』は、平和的民主的建設期として、第二段階（1950年6月～1953年7月）を祖国解放期として、第三段階（1953年7月～1958年）を戦後復興期および社会主義建設草創期の文学として区分している。この時期に現れた劇や小説の中の女性たちも、抗日闘争期の作品中の女性たちと同様、闘争的な姿で表現されている。短編小説「幸せ」の女主人公・



レジュも、抗日闘争期の文学で見られるように、政治的に覚醒できなかった軟弱な乙女が、人民軍に入隊して周囲の助けで覚醒していき、ついには人民軍野戦病院で看護師として働くようになり、祖国に対して燃えるような愛情を持つようになる女性として描写されている。彼らは、女性の登場人物についても「抗日革命の闘士や女性革命家」といった英雄としての形象化を意図していることがわかる。しかし、先に言及したように、文学にさらに接近して見ると、こうした女性の英雄は、本来的な資質によって形成されるのではなく、周囲の人物の助けによって形成され、教化の助けを与える人物は決まって男性だというのがポイントになっている。それゆえ、女性たちは、世間知らずの状態に敵から苦痛を受け、周りにいた男性の英雄によって助けられ、熱烈な革命党員になる、という叙述の流れだ。

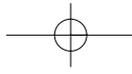
言い換えれば、女性の主体的自我は、自ら芽を吹いて育つのではなく、必ず男性の英雄によってのみ可能だというのだ。こうした思考は、1960年以後の映画「ある女性会員の物語」、「女隊員」においても同様に見られる。1920～30年代の抗日闘争期を素材として映画化した「ある支部隊長の物語」を賞賛したキム・イルソンの教示を見ても、彼らが文学に登場する人物を形象化する技法がわかる。

最近公表された映画「ある支部隊長の物語」は……比較的よくできていると言えます。この映画は、以前に公表された映画に比べて、主人公たちが革命家に育っていく過程と主人公たちの革命意識が発展する過程が、より深みのある仕方で描かれています。主人公ホ・マン Chol が革命闘争に乗り出す契機が明らかにされており、ヘヨンという女性が多くの困難を経験しながら革命の隊伍を訪れていく場面もよくできています。支部隊長がヘヨンを地下工作に送りだすためにさまざまな方法で教育する場面も、実感のある仕方でよく描かれています。映画において遊撃隊員たちを教育していたさまざまな方法を、生き生きと示すのはよいことです。

闘争的な女性たちでも、彼らは生まれつきの気質や自分の革命的素養によって共産主義者となるのではない。女性たちは、男性たちから覚醒させられるべき受動的な人物であり、覚醒させられる前には男性との競争は永遠に不可能だ、という論理になる。抗日革命の遂行期に、文学的表現として特に現れる、こうした女性に対する偏見は過去のものだとばかり言えるだろうか。時間の流れは、こうした素材と表現をどのように変化させているのだろうか。

#### IV. 専門職の女性たち

抗日革命闘争や南朝鮮の解放のための闘争的人物が形象化された後、1970年代以降に、専門職に従事する女性たちが文学作品に登場する。「彼を知るまで」の女医ヘシム、「私の教壇」の女性教師ヒョン・イスン、「故郷の面影」の交通整理員チョ・ソンヒ、「私たちの先生」に登場



する僻地で子どもたちを教える教師など、いまや彼らは、人を殺す革命の場にいるのではなく、それなりに社会で安定した専門職に従事する女性たちである。北朝鮮社会では、実際に、女性の就業人口が男性と同じであるか、あるいは男性の数値を上回っていることを、統計資料を通じて知ることができる。そして、女性たちは作業班の班長など工場によっては上位職にもいることが、次の文章からわかる。

「私たちの工場は、機械工である生産者、作業班長、職場長、技術者、管理者に至るまで、ほとんどすべてが女性たちです。いわば、大きな工場を私たち女性の力で動かしているわけです」

こうした現象は、実際に、北朝鮮社会がいかに女性の労働力を認めているかということを示している。しかし、ロ・ジョンピンの「故郷の面影」で愛し合う恋人たちが別れたあとで交わす手紙は、次のようなものだ。

「ピョンヤンがとても大切なので、そして首都の花として咲いたソンヒが好きなので、こうしたことのすべてが、私には祖国に抱かれていて思えるので、[この地に] 来ました…」

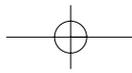
「同志には涙が似合いません。ピョンヤンが愛する交差点の花は、いつも明るく咲いていなければなりません」

「首都の花」、「交差点の花」は、ピョンヤンの交差点で交通整理をする女性チョ・ソンヒを指す用語だ。北朝鮮では女性の専門職への就業は、彼らの言うような「女性の解放」、「男女平等」の次元においてではなく、労働力の利用を最大限に増やそうとするものであることは、すでに指摘されているが、女性の権利に関するスローガンとは異なり、彼らが抱いている女性に対する考えは、朝鮮王朝時代とほとんど変わらないものだと言えよう。

よく人びとは、「女と花畑は手入れしだい」と言ったりする。それほどに女性たちにおいては、高尚な身なりとともに洗練された髪型は人品をいっそう高めてくれ、若々しく美しくさせる重要な働きをする。

偉大な首領様は、「女性たちは、自分の解放と権利の平等ばかりを考えるあまり、朝鮮の女性たちが昔から持っている固有の美しい品性を失くしてしまっただけならず、女性は女性らしくなければなりません」とおっしゃっている。

女性は誰もが自身の美しさを花のように飾らねばならないものだと教示しているわけだが、女性の美しさも命令されねばならないのか、また、花としての女性の職業は誰のためのものか、



という疑問がわく。

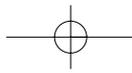
抗日革命闘争期や祖国の民主建設期の女性たちが、社会悪について無知で弱々しいところから、男性たちの助けを得て強靱な革命的気質を具える闘争的女性として描かれているとすれば、専門職の女性たちが登場し、彼らの言う主体思想の実現期である1980年代以後の女性たちは、革命家としての任務を遂行しつつも女性らしさを求め続けねばならない人物として描かれている。そして、この女性たちの任務は、究極的には、社会主義建設を目的とする祖国のためだ。しかし、専門職である女性たちの職業は、彼らが常に花としての素質を失ってはならないように、誰のために働くのかを忘れてはならないということも暗示している。言い換えれば、究極的には自己実現のための職業の場でないのはあまりにも明白であり、第一義には祖国のために働く男性たちを助ける補助者の役割ということになる。そうした点は北朝鮮文学のそこかしこで目にすることができる。

キム・ボンチョルの「彼を知るまで」において、女医のヘシムは、自分を訪ねてきた独身患者のウンソクが、長時間にわたる診療の結果どこにも病気がないことを知って彼に失望する。しかし、その患者は地質調査隊の中隊長であり、彼は自分の調査報告書作成のために<p>という薬剤に使われる土を自ら食べ、その結果を報告書にしたのであった。医師であるヘシムは、ことの次第を知らされないまま、報告書作成の過程で手助けをしたというわけである。この作品は、表面的には、二人の愛情に焦点を合わせてはいるが、詳細に読むとプロットにおいて、男性登場人物の社会での功績が明らかになるとき、作品の筋が絶頂に達し、二人の愛情も互いに確認される、という劇的な効果をねらっていることがわかる。したがって、女性登場人物は、男性が業績を上げる作業に知らないうちにも手を貸している。

専門職の女性たちは、特定の男性たちが業績・成果を上げるために犠牲となって手助けする補助者としての役割を進んで行なう人物として描かれている。彼らの語る、

「女性は花だ、生活の花だ  
家庭をまめまめしく世話する花だ」  
「トラジの花は、花のためではなく、根（主体思想）のために咲く」

という言葉に現れているように、女性たちは、究極的には、主体思想の実現の場所である社会のために働くが、彼らの労働や役割が社会と直接に対峙し、打って出るようなものではなく、主体思想を実現する男性たちを補助すべき人物として描かれているのが、もう一つの特色である。自己の能力を発揮する職場でも、女性の役割は男性のためにその能力を発揮するのである。それを当然のことと思わねばならず、社会の構成員としての自覚を忘れてはならないということが強調されている。



## V. 愛する恋人たち

北朝鮮の小説において純然と若者たちの愛が取り扱われるのは、1980年代以降だと思われる。1920年代以後1970年代までの作品において見ることのできる愛という語彙は、「人民軍の軍人たちの党に対する限りない忠誠と、祖国に対する熱烈な愛を見事に示すことによって」といった表現のように、「祖国への愛」、「党への愛」がまず第一だった。その内容においても、たいていは、「偉大な首領様に対する限りなく忠実な朝鮮労働党員の輝かしい形象の描写」となっていた。こうしたことは、1970年代までの北朝鮮文学が集団文学の時期であったために、個人の心情や愛を取り上げるよりは、社会が志向するイデオロギーということに主眼点を置いたからである。そうした時期から解き放たれた現代文学は、ある程度、個人の問題に焦点を合わせつつあると思われる。

特に、1980年代以後の作品においては、大いにその様相が変化したことが、実際の作品からわかる。『朝鮮文学史』で分析されている作品と1980年以後の作品とを比較してみるなら、その素材や主題の点で、革命的とか闘争という用語が著しく減少し、人びとの感情面に関心が向けられ、人びとの日常に焦点が合わされているように思える。若い恋人たちの愛という主題も、これらのことと軌を一にするものだと言えよう。

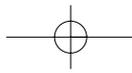
さらに、我われが作品をもう少し深く読むとすぐにわかるのは、柔らかくなった言語表現、これまでの作品よりも多様になった日常が目にとまる。しかし、作品の中に隠されている志向は、1980年以前といささかも異ならない言説からなっているということが、次の作品からも明らかである。

ロ・ジョンボプの「故郷の面影」は、交通整理員であるチョ・ソンヒという一人の女性の恋物語だ。ピョンヤン市の交差点で交通安全の違反者を取り締まり、処罰し、研修をさせるなかで出会った青年パク・トゥナムとの出会いと別れの物語だ。この小説は、その進行において明らかに恋人たちの物語となっている。トゥナムがチョ・ソンヒの勤務する時間に車を運転し、その勤務先を通り過ぎること、チョ・ソンヒが違反した車を捕まえるためにトゥナムの車に便乗させてもらうなど、援助を求めることを通して二人は自然と親しくなる。

このような中でも、チョ・ソンヒはパク・トゥナムに対して「特別の感情を抱いたことがなく」過ごすが、パク・トゥナムが大劇場のチケットを持参し、デートを申し込むあたりから、チョ・ソンヒはパク・トゥナムに対して不愉快になり、拒絶する。その後、パク・トゥナムは、チョ・ソンヒの目の前からいなくなる。後日、モランボンに通じる大通りで、街路のゴミとタバコの吸い殻を拾う青年パク・トゥナムに再会する。

「あ、ソンヒ同志ですね。」

トゥナム同志は私を見るととても喜んだが、明るく笑っている彼の顔はぎこちない気配をまったく見せない純潔なものだった。私がこの青年に余計な先入見を持って、遠ざけようと



したのではないかと…

以後、二人の仲は、愛という確信はないが、「早春の陽炎のように心を誘い、揺らめきを感じるほどに、どうしようもなく」愛し合う仲となる。その直後、トゥナムが大工事の建設現場へ行かねばならないことになる。このとき、トゥナムの方がむしろ苦しむが、チョ・ソンヒは、彼との永遠の別れになることを知りながらも、「私が反対すると思いましたの？ 時代の要請に従おうという同志をもちろん私は…」と語っており、彼との別れにまったく葛藤がない。トゥナムは、それなりの葛藤を抱えて悩みながら去ったあと、自分がチョ・ソンヒについて抱く思いを、「ピョンヤンが愛する交差点の花」、「故郷の面影」だと手紙に書いている。その手紙を読んだチョ・ソンヒは、

ピョンヤンが美しいからそこに暮らす人びとが皆美しいように、時代を抱いて生きるから人びとが親しくなるように、私たちの党中央がこの街路を美しく装ってくれ、私を時代の花として首都の真ん中に立たせてくれたので、花を探して飛んでくる虫のように、そんな愛の手紙が届いたのです…

手紙の一字一句が祖国への讃歌の旋律となって響いてきます…

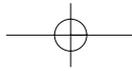
と語る。この作品の男主人公は、愛していた一人の女性を「故郷の面影」として心にしまっておこうとする一方で、女主人公は、自分の日記帳のタイトルを「時代と愛についての歌」としている。平凡な若者たちの愛を描き出しているようではあるが、時代に相応しい祖国を愛するための歌ということだ。

この作品に関する限り、その内面的特性を二人の空間を中心に考察してみると、次のようになる。チョ・ソンヒとパク・トゥナム、この二人が出会って愛し合うようになるまでの過程について、彼らは「私たちは首都（ピョンヤン）で生きる。だから私たちは、最初に会ったときに互いに理解し合うようになったし、二度目に会ったときにはいっそう隔てがなくなり、日々に親しくなった」と表現されているように、人と人との出会いにおいて環境が優先するという点が注目される。言い換えるなら、空間が人を規定し、空間によって出会いの理由と意味が具体化するのだ。こうした点は、北朝鮮社会での地位による空間配分の現象を教えてくれるものである。第二に、トゥナムが特別な気持ちを抱いて接近するときには、チョ・ソンヒは彼に冷たく当たり、二人が会わずに距離を置くようになった後、再会して親しくなる契機というのが、トゥナムが街路のゴミと吸い殻を拾うピョンヤン市民としての義務を果たしているということをチョ・ソンヒが見ておおいに感動し、彼のことを認めて愛するようになるというものだ。これは、若い恋人たちの愛も祖国に対する義務が優先すべきであることを表したものである。彼であるから人間として愛するというよりは、義務を果たすから愛する、という論理になるわけ

である。第三は、無葛藤についてである。実際、無葛藤というよりは、葛藤の無表現というほうが適切だと思われる。1920～1970年までの北朝鮮文学は、党・祖国・首領のためには葛藤があってはならないということを主張する集団文学の時期であり、実際の作品もそうだった。現在、この作品で描かれているように人間の内面の葛藤くらいは表現できるということも、北朝鮮文学の表現が実際に変化しつつあるということを示すものだろう。一般的に考えると、二人の具体的な葛藤は、別れねばならないという問題であるが、彼らの別れは、愛情が冷めたとか三角関係であるとかという葛藤ではない。また、再会を期すことのできる有限な期間ということでもない。永遠に会えなくなる別れということへの葛藤がなければならない。しかし、トゥナムは、「人民生活を高めるための生命線となる、順川ピニロン連合企業所の建設」のために行く。つまり、祖国と人民のために自分の感情を押し殺したまま去っていくのだ。しかし、二人の心の中では別れに対する悲しみは強烈に起こるが、別れさせた党に対する恨みは露ほどもない。党が招請することに対しては、葛藤がまったくないのだ。自分たちの悲しみの問題を生みだした根本的な原因に対する恨みや葛藤よりは、別れという表面的な感情に依存しているというのがポイントだ。愛する二人の根本的な葛藤の問題を、個人的な感情の問題として処理するという手法を選んでいる。祖国、人民、時代を愛するという大義に包んで、別れに対する悲しい感情を克服することによって、別れをあらしめた葛藤の根本を解決しているのを見ると、彼らの文学が、表現上は変化してはいるものの、登場人物がいかにか生きるべきか、誰のために生きるべきかという問いに答えを提示し、文学が具えるべき登場人物の葛藤を提示し、人物形象化の本来の意味を解決するという点については、今でも不十分なままだと言えよう。

## Ⅵ. 完璧な妻たち

北朝鮮のみならず韓国の実家の妻たちの暮らしも、家族たちから家事や育児、義父母の世話に完璧であることを要求されるのは同様だと思われる。現代的な教育制度が始まる以前、朝鮮の女たちの生は、台所の床に藁を敷いて座り、子に乳をふくませ、竈に薪をくべて飯を炊き、出かけた夫がいつ帰ってくるかと目を玄関に向け、家の中では義父母が水を求める声に耳を澄ましていなければならない、というものだった。女性たちの四肢と感覚のうちで、目覚めているあいだ休むところは一つもなく生きてきたのが、我われの祖母、母たちであった。そして、新教育が導入され、はじめて女性たちの生と行動が家庭内から外へ向かうようになった。そうしたとき、日本による植民統治が始まったため、女性の社会的地位や権利を主張するよりは祖国の解放が第一となった。祖国の解放という切迫した問題を、当時のカップ文学者たちは共産主義理論と接合させた。そこで1930年代の我が国の文学は、祖国の解放が労働者の解放であり女性の解放であるという図式によって、文学的展開をしていった。そしてカップ文学が、マルクス・レーニンによる共産主義理論を中心として、女性の役割のうち、家庭の仕事より社会での生産労働力としての価値を優位においたため、生産の前線に立っている女性たちを我われは



解放された女性として安易に認識してきた。

しかし、生産の前線に立っている女性たちの立場と妻たちの立場とは別のものなのか、また、彼らは家庭でも解放されているのか、作品を通してこれらを考察してみよう。

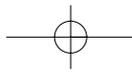
「妻」という登場人物の形象化は、時代ごとに違った形で現れる。抗日革命闘争期を素材として書かれた「血の海」に出てくる妻スンニョの夫であるユンソンは、抗日武装闘争に参加して活動していたとき、その村を襲った倭奴（ウェノム）[日本人の蔑称]らの討伐により、銃に撃たれた後、火刑に処せられる。ひとり残された妻のスンニョは、子どもたちをつれて村を去る。その後、成人した息子ウォンナムが覚醒し、共産黨員としてパルチザンとなる。スンニョは息子の勧めで、祖国回復のために黨員となる。夫と共に暮らしていたときは弱々しかった一人の女性が、この作品の終局では強固な革命的主体性を持つようになる。

皆さん、貧しくて冷遇される私たちが革命をしてこそ、仇を討ち国を取り戻すことができ、将来、幸せに暮らせるようになります。今日のように遊撃隊が銃を取り、私たちの前途を切り開き、私たちが命を懸けて戦っていくとき、血の海に浸かった我が国は必ずや独立するでしょうし、回復の新たな朝が明けはじめるでしょう。みなさん、革命をしましょう。革命のみが私たちの生きる道です。

彼らの言う堂々たる妻たちの功績は、次のように詩にも書かれている。

あなたがいなくなったあと  
私は果敢に戦いました  
勇敢な同志を訪ねて 進むべき道を探りましたし、  
ある夜にはあなたが書いたビラを刷りました  
そのとき 腕全体が痛いのも、辛いのも忘れしました  
私たちの闘争を描いたこのビラは  
すべての同志のポケットの中に、懐の中に、  
ピオニール [共産主義少年団] の机の中に  
納められました…

肯定的な妻の姿の典型として、一人の女性が時代の変化に応じて、いかに変わるべきかを示すものとして描かれている。言い換えれば、闘争期には闘争的な女性に、産業化時代には産業の前線に参加して生産労働力をもった女性にならねばならない。そのようになるために、女性たちを鼓舞する次のような文章がある。



女性たちは、社会に進出せずに家の中に閉じこもってはい、自分の革命化、労働階級化をなすことができません。女性たちが家の中に引きこもっていると、夫と子どもの世話以外にはすることがありません。女性たちがこのように家の中に引きこもって社会とかけ離れた生活をするようになると、活発な闘争が繰り広げられている現実を体験することができず、米がいかに貴重か、布地と靴がどのようにして生産されるのかがわかりません。そうすると、次第に怠惰で気が緩み、自分ひとりだけいい暮らしをしようという利己主義の思想が芽生えるようになり、ついには国と社会をむしばむ穀潰しに転落する可能性があります。

国家が必要として招集すれば、すぐに駆けつけねばならない女性たちにとって、家庭での役割も決して簡単にやり過ごせることではない。北朝鮮において、家庭は社会という機構の細胞であり、社会を発展させるためには葛藤があってはならないというのが、彼らの主張だ。

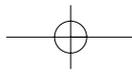
家庭は、父母と妻子、兄弟姉妹などをはじめ、血縁的に最も近い人びとが集まって生活を共にする社会の細胞だ。人の体も、有機体をなしている細胞が病まないでいてこそ健康であるように、社会も各家庭が健全であってはじめて革命的雰囲気立ちこめ、すべての家庭が革命化されてこそ、社会全体が革命化されうる。人は家庭で生まれ、通常、家庭と学校そして一般の社会生活から教育を受ける。

こうした社会の細胞としての家庭の問題を扱っている作品が、ベク・ナムニョンの「友」だ。「友」は、若い夫婦が離婚をするために判事を訪れるところから始まる。この小説の内容は、チョン・ジンウという判事を立て、一つの家庭が離婚に終わるほかない熾烈な個人の感情の葛藤を描き出すものではなく、一つの社会の細胞である家庭の葛藤の要因を除去できるように目覚めさせることによって、無葛藤の原則を適用して葛藤を解決するべく結論を導くものである。こうした結論へと導いていくしか術がないのは、この作品に登場する人物たちの場合もそうであるように、離婚する夫婦は否定的人物であるからだ。北朝鮮文学において否定的人物はそのまま共存できる人びとではなく、社会の建設という大義の前で放逐されねばならない人びとである。それゆえ、そうした否定的な人物にさせないために、どこまでも人間の教化と改造が成し遂げられねばならず、こうした仕事の基本を引き受けるべき人びとが、家庭の母、妻たちである。

この妻たちに対して国家は、次のような配慮をしている。

第62条：女性は男性と同一の社会的地位と権利を有する。

国家は、産前産後休暇の保障、数人の子どもを持つ母のための労働時間の短縮、産院、託児所および幼稚園の地域網の拡大、その他の施策を通じて母たちと子どもた



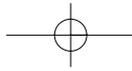
ちを特別に保護する。

国家は、女性たちを家事負担の重責から解放し、彼らが社会に進出するあらゆる条件を保障する。

第63条：結婚および家庭は、国家の保護を受ける。国家は、社会の細胞である家庭を強固にすることに深く配慮する。

この法律から見てとれるように、女性たちを家事の負担から身軽にし、家庭をしっかりと保護することになっている。実際、彼らが女性たちを社会の各生産現場に立たせているという事実は説得力があるように見えるが、社会生活をしている女性たちの実際の家庭での役割は、作品「友」では次のように描かれている。野菜の研究をしているホ・ウノクが研究のために数日間、家を空けて帰ってきたとき、夫は、家には妻がいなければならないことを痛感する。そして、妻が職場に出られるのは夫の配慮のおかげだ、というのがポイントだ。同様に、妻は、空けていた家に帰ってきて済まないと思い、その間空けていた埋め合わせをするために、さらに熱心に仕事をしている。別の夫婦であるスンヒの友人のウンミ夫妻の場合でも、他人の目には妻のウンミが楽しそうに見えるが、家庭内では夫の博打や横暴に耐えねばならない境遇だ。また別の夫婦であるヨンゴン夫妻の場合でも、女学校の教員をしている彼女は、昼間は学校に出て教案の作成、新たな郵便物の制作、生徒たちの数学の実力向上－担任をしている学級の生徒たちの品行、成績、教育の問題－など多様な業務と問題で苦しみ、夜、家に帰っては、酒を飲んで帰ってくる夫を待たねばならないという、辛い暮らしをしている人物だ。

北朝鮮が現実の法律では女性の社会的地位や家事労働に対する配慮をしているにもかかわらず、文学の中の人物たちは現実とは異なり、法律の保護を受けられずいたり、法律が彼らからかけ離れたりしているという話になる。しかし、彼らの追求する文学の世界が、閉じた文学のみの世界だとは見なしがたいという点を考えると、前者が現実だというよりは、後者が現実だと見るのが妥当だろう。言い換えるなら、文学の世界に描かれている人物たちは、現実に変化する状況の中でも、朝鮮王朝600年の間守ってきた儒教の男女差別の精神的な面ではまったく変貌できずにいるということである。ここで変化しているものがあるとするならば、社会がスローガンとして打ち出している「抗日、闘争、革命、労働、産業」の最前線に、北朝鮮の人民たちの社会・国家のための労働化があるのみであって、深く根を下ろしている家父長制のなかでの男性という権威と特権は放棄してはいないのだ。それゆえ、男性たちの家庭内での立場はまったく変化せず、女性たちの場合だけ、社会での産業労働力としての任務、家庭内での義父母や婚家の家族たちとの関係、夫の世話、育児や子どもの教育など、すべてに完璧であることが当然とされるように描かれているのだ。



## VII. 結論

北朝鮮文学に現れる女性登場人物の形象化の特性をここまで考察してきたが、時代区分と関連させて、次の5点に要約できる。

①彼らの言う抗日闘争期と朝鮮戦争期、戦後復興期の文学に現れる特徴的な女性の姿は、息子を闘争の現場に送り出した後、待つ母の姿として描かれている。これらの母は、おしなべて、革命闘争を遂行する勇敢な息子を持つ母たちであって、息子と同様に、闘争的・革命的な思想の持ち主である。こうした母たちの姿が、北朝鮮の現代文学になると、南北分断にまでつながるような別離に対する恋しさを胸に抱いて生きる人びとであって、統一が成るまでは決して死ねない、だから南朝鮮をアメリカ帝国主義から解放して必ずや息子と再会せねばならない母の姿だ。彼らのこうした精神の典型的モデルは、キム・イルソンの母であるカン・バンソクとして設定されている。

②上記と同じ時代の文学において提示される革命闘士としての女性の姿は、軟弱で能力のない女性たちが、判で押したように皆、夫や父や兄が敵軍に殺されて途方に暮れているときに、周囲の共産主義精神で透徹している男性の助けを借りて、次第に闘争的・革命的となって社会に貢献するようになる、そうした人物として描かれている。

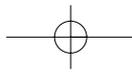
③朝鮮戦争以後、彼らの言う平和回復の時期以降、文学の中で形象化されて現れる女性の姿は、たいていは分野別専門職の女性たちだ。こうした女性たちは、社会でもその能力を認められ、各方面で自分たちの仕事を遂行していくが、彼女たちが遂行する仕事の性格は、男性・女性の対比によって能力を評価されるものではなく、男性たちが業績を上げるための補助者の役割を担うものであり、しかも、それを当然と見なすものだ。

④1980年代に集団文学の時期から個人作品の時期へと移行するとともに、北朝鮮文学においては、若者たちの恋愛が素材として取り扱われている。これらの若者たちにおいて現れる特徴は、恋人たちの間で性格の違いによる葛藤や三角関係のような問題が発生しないということである。代わりに、社会に対する義務を遂行する度合いに応じて、愛する資格が生じるようになる。また、社会が招請するときには何らの葛藤もなく別れることを当然と見なし、しかも社会が必要として招請する産業労働力は男性側であって、女性は送り出す人物として描かれている。

⑤女性登場人物が形象化されるにあたって、最も複合的な役割遂行者は、家庭の主婦である妻たちだ。この妻たちは、彼女たちが必要とされる場所ではどこでも、どのような仕事においても、「完璧な女性」でなければならない。社会や家庭は、社会の変化に応じて彼女たちの労働力と精神力を必要とし、家庭は、朝鮮王朝600年間と同じ服従と従順をひたすら女性に強要するばかりだ。こうした点からすれば、法律によって定められた女性の権利も、労働力を得るための手軽な手段であり、精神的意識の面での改革を意味するものではないと解される。

以上の点に基づいて、次のような結論が得られる。

第一に、北朝鮮の女性登場人物たちは、彼女たちがどのような立場にしようとも、息子（娘



ではなく)の母であり、男性によって教化される受動的な存在だ、という点があげられる。

第二に、北朝鮮の女性登場人物たちは、主体であるよりも副次的な人物として描かれているという点だ。つまり、自己実現のために生きるのではなく、社会のために働く男性を補助するという立場を当然のこととして受け入れねばならない、という点だ。

第三に、北朝鮮の女性登場人物たちは、社会変化の現象を肉体的に受け入れているのみであって、精神的な面ではまったく葛藤があってはならないということを強要されている、という点だ。

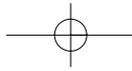
第四に、北朝鮮の女性登場人物たちは、社会的に結婚を当然のことと見なし、家庭を完璧に営んでいく女性の典型としての姿を提示している、という点だ。

すなわち、女性たちの存在は、第一義には息子、上司、協力者、恋人という男性たちとの関係のうちに置かれ、男性たちは、女性との関係において、受動的な女性たちよりも行為において上位に位置するようになる。男性たちは、国家とキム・イルソンに対する関係のうちに置かれ、その関係は忠誠という垂直線で結ばれている。他方、女性たちの立場は、社会やキム・イルソンとの直接的な関係ではなく、男性たちによって主導されるがゆえに間接的な状態にあり、男性を通して社会や国家やキム・イルソンとの関係に繋がることになり、下位人物として描かれている。

以上の内容は、北朝鮮文学の形成期から1980年代に至るまでの期間に、最も頻繁に取り上げられる現象を中心として分析したものである。しかし、北朝鮮も、1990年代に4・15文学の同人たちを中心に文学的現象の変化を示している。たとえば、母たちの関心事として日常なこと、つまり子どもの結婚、職場に関する事などが描かれており、子どもの教育問題に関することが素材として取り扱われている。

しかし、本研究においてこうした部分を取り扱わなかったのは、まだ普遍化した現象だとは見なし難かったからである。現在、北朝鮮の作家たちが東欧や米国への自由往来をある程度許容されていることを考えると、明らかに文学においても、そうした変化が一般化されるだろう。そうした現象に関する集中的な研究は、次の機会に譲ることとする。

(訳者註：解説で述べた『統一と女性－北朝鮮女性の生』の中にあるキム・ヒョンスク氏の論文「文学から読む女性」では、上記と関連して、以下のことが述べられている。「…その後、1994年7月のキム・イルソンの死後、北朝鮮の文学は再び硬直化するきざしとなった。しかし、2000年6月の南北離散家族再会以後、再度、文学の素材は変化するだろうと思われる。」)



<参考文献>

- 과학백과사전출판사 (1981), 『조선문학사』 (1926-1945).  
 과학백과사전출판사 (1978), 『조선문학사』 (1945-1958).  
 과학백과사전출판사 (1979), 『조선문학사』 (1959-1975).  
 과학백과사전출판사 (1980), 『조선문학사』 (19세기말-1925).  
 과학백과사전출판사 (1977), 『조선문학사』 (고대 중세편).  
 김인숙 (1993), 『김정일 사회주의 위업의 향도자』, 평양출판사.  
 김재용, “80년대 북한소설의 특성과 문제점”, 『창작과 비평』  
 김정일 (1991), 『주제사상에 대하여』, 조선로동당출판사.  
 남대현 (1988), 『청춘송가』, 서울: 공동체.  
 림종상 (1990), 『쇠찌르래기』, 살림터.  
 ----- (1992), “다시 출발점에서”, 『조선문학』 92년 12월 1992년 여름호.  
 박종원, 류만, 『조선문학개관 2』, 사회과학출판사.  
 백남룡 (1988), 『벗』, 살림터.  
 백진기, “북한문학의 올바른 이해를 위하여”, 『실천문학』 1989년 여름호.  
 사회과학언어연구소, 『조선말대사전』 1.2.3.4.  
 사회과학원 문학연구소, (1989), 『북한의 문예이론』, 인동.  
 사회과학원 문학연구소, (1988), 『조선문학통사—현대문학편』 인동.  
 사회과학원 언어연구소 편(1978), 『조선말 대사전』, 서울, 동광출판사.  
 성기조 (1990), 『북한비평문학 40년』, 신원문학사.  
 오카레크 최 (1992), “북한문학 발전의 기본 특징”, 이대석좌교수 지정강연.  
 이어령 편저(1988), 『대문장백과사전』, 금성사.  
 이상화, 장필화, 조형 (1992), “북한의 여성관”, 통일문제 학술세미나 자료집,  
 한국여성연구원 주최 (통일원 후원).  
 임현영 (1989), “북한문학개관”, 『실천문학』 1989년 여름호.  
 정홍교, 박종원 (1988), 『조선문학개관』, 사회과학출판사.

